

新規就農 待望の収穫

【三重・伊勢】JA伊勢管内の御浜町で、2025年産「三重南紀みかん」の収穫・出荷が始まった。露地物のトップバッターは超極早生温州ミカンの「味一号（品種＝みえ紀南1号）」。JAでは、9月下旬までに約800トの出荷を計画する。今年初めての収穫を迎えた、新規就農者の多々納康志さん(54)も初日の早朝から「味一号」の収穫作業に汗を流した。

三重県御浜町 多々納康志さん(54)

「味一号」は、南紀地域の主力の温州ミカン「崎久保早生」と「サマーフレッシュ」の交配品種。露地栽培の温州ミカンでは、全国でも早い9月上旬から収穫できる。外皮に先行して果肉が成熟するため、食味もしつかりと乗せて出荷できる。

今年産は、生産者による摘果作業やかん水作業などの栽培管理の徹底、マルチフィルムを使った水分管理などの成果で、収穫時期はほぼ平年並みに迎えた。やや小玉だが、糖

三重南紀みかん「味一号」

度も高く、酸とのバランスのとれた食味に仕上がった。

産地では、出荷までの工程で果実同士がぶつかり合っても傷がつかないよう「二度切り」を徹底する。昨年に同町に移住した多々納さんも、果実を傷つけないよう注意しながら、二度切りを行い、「干ばつが心配だったが、かん水や摘果など管理がうまくいき、糖と酸のバランスの取れたミカンに仕上がった。剪定（せんてい）や摘果など来年に向けた課題も見えた。後悔しないようしっかりと取り組みたい」と話した。

JAの統一選果場では、作業員約30人が目視での選別、糖酸・腐敗果センサーでの選果、箱詰めなどの出荷作業に追われた。外観に問題がなく、糖度が10以上、酸が1・1%以下の基準をクリアしたものは、三重ブランド「みえの一番星」として出荷する。



「味一号」を二度切りで収穫する多々納さん